

編集 後記

会員の皆さま、明けましておめでとうございます。震災の年が終わり、本年が会員の皆様にとって、明るい光が感じられる年であることをお祈り申し上げます。

さて、2012年1月より、編集委員長を拝命いたしました。新年号の編集後記にあたり、重責に悩みつつもお受けした思いなども含め皆様にご挨拶させていただきます。

“一隅を照らす”―私の大切に思っている言葉です。伝教大師・最澄によるものです。

私事で恐縮ですが、公衆衛生を志した原点に、ひとりの保健師さんの姿があります。私には障害のある妹がおりましたが、専門病院の検査で障害が診断され、途方にくれる両親を日々支え、次の道を示して下さいしたのは、町の保健師さんでした。自転車で立ち寄られては、母を励ましてくださる姿が、我が家にとっては大変有り難い存在でした。こうした目立たない地域での活動も、最先端の検査や治療法と同様に、人々の健康と幸福に必須なことであり、こうした活動に科学の光をあて“一隅を照らす”ていければという思いから、公衆衛生の道にはいりました。そして、在宅医療を実践する中でこの思いはさらに強くなりました。

その後、学位論文として、在宅ケアにおける往診医の意義などをまとめましたが、当時は、学位審査の段階ではこれが医学研究といえるか・・・というご意見（公衆衛生以外の先生方ですが）などもあり苦勞いたしました。しかし、それが、厳しい査読と修正を経て、本雑誌の黄色い表紙に原著論文として掲載されました時には、この上ない喜びを感じました。1990年のことです。本誌は、論文を通して、こうした地域活動へ科学の光を灯しうる貴重な雑誌であろうと思います。自身のこの新鮮な喜びを忘れず、編集業務も進めていきたいと思う次第です。今月号にも、医学生主著者による大学生の飲酒状況、学校教員のAED習得、脳損傷者の介護者の負担感、農村・山間地域の膝関節痛・・・と、多岐にわたる現場に根差した本学会らしい論文が掲載されています。

さらに、この最澄の言葉は、「一寸十枚これ国宝に非ず、一隅を照らすこれ則ち国宝なり」―財宝は国の宝でなく、一隅を照らすことこそが国の宝であると続きます。こうした地域の光を集め、科学的に議論し、大きな国の方向やあり方を照らすことも、この困難な時代において、公衆衛生学を担う本誌の役割として重要であろうと思います。

これらのことから、編集委員長の抱負として、以下の3点を挙げさせていただきます。

- ① 現場に根ざしたレベルの高い科学的論文の掲載
- ② 我が国の実態・取組の科学的集積から、国のあり方をも公衆衛生学として議論する。
- ③ 世界に向けて日本の見識にたった発信をする。

①では、すでに学会座長推薦発表に対し、投稿料免除を開始しましたところ、おかげさまで、この枠の投稿が増えております。さらには、論文の書き方研修会や公衆衛生専門家制度との連動なども考えております。現場に根ざすことと学術レベルの共存が時にむずかしいこともあります。この点は、甲斐委員長時代に、考慮して改変くださった論文の新カテゴリーを生かし、工夫していき

次号予告（第59巻・第2号）

原著

健康高齢者に対する予防的・健康増進作業療法プログラムの効果

ランダム化比較試験……………川又寛徳, 他
自覚ストレスと循環器疾患死亡との関連

大崎国保コホート研究……………木幡映美, 他

公衆衛生活動報告

青年海外協力隊栄養士の派遣形態（新規、交替）における困難な活動内容と改善策に関する検討

……………石川みどり, 他

小学校での2つのノロウイルス胃腸炎の集団発生事例の記述疫学報告……………木村博子, 他

研究ノート

幼児の母親における幼少期の食生活と現在の偏食との関連……………木田春代, 他

連載

ヘルスサービスリサーチ(19)……………樋之津史郎

たいと思います。②は、チャレンジングではありますが、そうした議論の場としての学会誌の位置づけも意識して進めていければと思っています。③は、しばらくは現在のように英文論文をおりませて掲載してまいります。いずれは、英文論文の推進も考えております。英文論文の価値は、世界水準の議論に耐える論文であることが第一ですが、時として、欧米誌の見識眼では、日本独特な問題が関心事外となることも多々あります。我が国の公衆衛生的見識で選んだ質の高い論文を、世界に発信していく必要があると考えます。新年号の原著が英文であり、我が国ならではのケアのあり方を評価したものであること、うれしく思います。

さらに、もう1点、加えるのであれば、現在、本雑誌の主著者の60%が女性だそうですが、歴代の編集委員長には女性がいなかったことです。ジェンダーのみで語るのはあまり好ましくはありませんが、一隅をともに照らすことにプラスになればと考えております。

そして、黄色い表紙を開くと、会員の皆様それぞれのパブリックヘルスマインドが喚起され、わくわくするような雑誌でありたいと思います。

しかし、言うは易く行うは難しです。

甲斐委員長時代に、全文pdf化による学会ホームページ公開―これは、本雑誌をより多くの方にお読みいただく上で、大きなステップでした―や投稿原稿の種類の変更、そして、投稿からの期間の大幅短縮など大きな変革を成し遂げられました。そして、着任した今、それらが、決して容易なことではなかったことを痛感しております。新編集委員会でも、まずは、J-stage導入をはじめとして、編集プロセスの工夫を重ね、質の向上に努めてまいりたいと思います。

しかし、これらの基盤は、会員のみなさま一人一人のご貢献です。どうか、毎号、本誌を手にとっていただき、そして、よい論文をご投稿ください。ごいっしょに、我が国の公衆衛生のため、ともに歩んでまいりましょう。

不慣れで力不足の点多々ございますが、どうぞよろしくご願い申し上げます。 (田宮菜奈子)